

初めての病院実習を経験する学生に対して教員が 必要と感じる実習前の学習内容と方法

廣澤紀代・中橋苗代・梶谷佳子
岡田純子・渡邊有紀

I. はじめに

近年、我が国では、少子高齢社会に伴い、地域医療体制や地域包括ケアシステムの構築が進められ、看護者には様々な場面において、人々の身体状況を観察・判断し、状況に応じて適切に対応できる看護実践能力が求められている(文部科学省, 2017)。また、入院期間の短縮化や、在宅・外来医療の進展、地域包括ケアシステム構築の推進等の中、療養する人々の生活の場は多様化している。さらには、疾病や健康の概念も変化しており、看護者には対象を生活者として捉え、看護を提供するという役割が一層求められている(厚生労働省, 2019)。

看護基礎教育においては、看護実践能力を育成するための学習として臨地実習が重要な位置づけをなす。臨地実習は、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得することを目標としている(文部科学省, 2009)。学生にとっては、患者と直接関わる経験を通して看護への意欲や関心を高め、看護実践能力を養っていく重要な学習機会となる。

中橋, 渡邊, 梶谷, 廣澤, 岡田(2022)は、学生は臨床をイメージできない状況での学習や、臨床というリアルな場での看護過程の遂行という実習困難感を抱いていることを明らかにしている。また、Billings, and Halstead (2019/2021)は、思考と実践の双方のスキルを統合しながら、環境に適応する必要があるため、臨地実習は学生の不安が高まる(p.282)と述べている。つまり、不安や緊張が強い中、さまざまな学習をしなければならない状況が、学生の実習困難感につながっていると考えられる。しかし、籠ら(2013)は、臨地実習前の事前学習の取り組みが学生の不安を軽減したと述べており、事前学習の充実が学生の実習困難感の軽減につながると考える。

A大学では、2年次に、「看護過程の理論を活用し、対象者が自らの健康問題を解決するために根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力を培う」ことを目的とした健康回復看護学実習Iがある。健康回復看護学実習Iは学生にとって初めての病院実習であり、学生は不慣れな環境の中で患者を受け持ち、看護過程を展開しなければならない。そのため、学生は事前学習を取り組み実習に臨んでいるが、これまでは事前学習が十分に活かされていない現状があった。よって、学生の緊張や不安が軽減され、実習の効果的な学びにつながるような事前学習を検討する必要があると考えた。そこで、本研究は、初めての病院実習を経験する学生に対して教員

が必要と感じる実習前の学習内容と方法を明らかにし、効果的な実習前準備教育についての示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ. 研究目的

初めての病院実習を経験する学生に対して教員が必要と感じる実習前の学習内容と方法を明らかにする。

Ⅲ. 用語の操作的定義

松尾(2012, P.10)は「経験によって、既存の知識、スキル、信念に変化が生じること」を学習と述べている。また看護の臨地実習は、学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ、看護方法を習得することを目標としている(文部科学省, 2009)。これらを踏まえ、本研究において、実習前の学習とは、「実習目標の達成に必要な知識・技術・態度の獲得につながった、あるいはつながる可能性のある経験」とする。

Ⅳ. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究参加者

研究参加者は、A大学看護学部の教員のうち、健康回復看護学実習Ⅰにおいて直接学生の指導を行い、研究参加への同意が得られた10名の教員。

3. データ産出方法

5名を1グループとして、インタビューガイド(表1)に沿ったフォーカスグループインタビューを実施した。インタビュー内容は参加者の同意を得てICレコーダーで録音し、面接内容はメモに残した。

表1 インタビューガイド

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 健康回復看護学実習Ⅰでの学生指導で、指導に困った場面や内容、その理由についてお聞かせください。2. 健康回復看護学実習Ⅰで学生が実施した看護ケアのうち、学習の必要性を感じたケアとその理由についてお聞かせください。3. 健康回復看護学実習Ⅰの実習前の学習として必要だと思う内容、方法、その理由をお聞かせください。 |
|--|

4. データ分析方法

インタビュー内容を逐語録に起こし、次の手順で質的帰納的に分析した。

- 1) 逐語録を熟読し、「学生に対して教員が実習前に必要だと考える学習内容と方法」を語った部分を抽出しコード化した。
- 2) 各々のコードがデータを的確に表現しているかを検討し、各コードの類似性・相違性に基づき、抽象度を高めグループ化し、サブカテゴリー名をつけた。
- 3) サブカテゴリーがコードやデータを的確に表現しているかを検討し、抽象度を高めてグループ化し、カテゴリー名をつけた。
- 4) 分析過程においては、共同研究者間で討議を重ねることで理解を共有し、分析を進めた。
また共同研究者間で意見が一致するまでと検討を重ねることで、分析内容の真実性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

健康回復看護学実習Ⅰを担当した教員に対して、本研究の趣旨、目的、意義、方法を説明した。参加は自由意思であり、参加を断っても不利益が生じないこと、参加は人物評価とは無関係であること、承諾後であってもインタビュー前であれば自由に承諾を撤回できること、データの取り扱い方法、プライバシーの保護、成果の公表について説明した。なお、説明は依頼される教員と職位が同等の人物から行い、強制力が働かないように配慮した。

本研究は京都橘大学研究倫理審査委員会の承認(承認番号19-59)を得て実施した。

V. 結 果

分析の結果、教員が初めての病院実習を経験する学生に対して必要と感じた実習前の学習内容と方法として、4 カテゴリー、13サブカテゴリー、36コードが生成された(表2)。カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉、コードは「 」で示す。コード内の()は文脈の前後で語られた言葉で、語りの意味を補っている。

表2 初めての病院実習を経験する学生に対して教員が必要と感じた学習内容と方法

カテゴリー	サブカテゴリー
既習内容の学び直し	既習内容の復習
	既習内容の想起
	看護技術の意義の理解
	看護技術の再練習
臨床で実践する看護技術	患者に適した報告の練習
	必要な情報を聴取する練習
	流動的な臨床場面の看護技術
	意図的・援助的なコミュニケーション技術
	プロセスレコードを用いたコミュニケーションの振り返り
倫理的な事例検討	臨床に合わせた看護技術
	事例を用いて倫理的な内容に気づききっかけ作り
グループメンバー間の意見交換	倫理的な場面の考察
	グループメンバー間の意見交換

1. 【既習内容の学び直し】

【既習内容の学び直し】は、〈既習内容の復習〉、〈既習内容の想起〉、〈看護技術の意義の理解〉、〈看護技術の再練習〉の4サブカテゴリーから構成された。

〈既習内容の復習〉では、「バイタルサインの正しい単位なども含めて覚えてほしい」や、「学生はバイタルサインの異常値などちゃんと覚えてほしい」といった内容が語られていた。また「実習の前にこれまで行った学習を活かすため学生に想起させる機会をつくる」、「環境整備の必要性について何のためにするのかから順を追って直接やり取りする」といった〈既習内容の想起〉の必要性が示された。「学内にいるあいだに足浴や口腔ケアの意義を確認してから実習に向かえば実践につながりやすい」といった〈看護技術の意義の理解〉や、「学生はできていると思っているが、実際は十分ではないので練習をしてほしい」といった「看護技術の再練習」を教員は必要であると認識していた。

2. 【臨床で実践する看護技術】

【臨床で実践する看護技術】は、〈患者に適した報告の練習〉、〈必要な情報を聴取する練習〉、〈流動的な臨床場面の看護技術〉、〈意図的・援助的なコミュニケーション技術〉、〈プロセスレコードを用いたコミュニケーションの振り返り〉、〈臨床に合わせた看護技術〉の6サブカテゴリーから構成された。

〈患者に適した報告の練習〉では、「対象者の状態やアセスメントを踏まえた適切な報告のための練習をする」といった内容が語られていた。また、「申し送りが必要な情報を得る練習が必要である」といった〈必要な情報を聴取する練習〉を行う必要性が表出された。そして、「学生にいい意味での緊張感がもてるよう、病院の環境に設定した看護技術の手順の工夫が必要なシミュレーションを実施する」といった〈流動的な臨床場面の看護技術〉や「既習の環境

初めての病院実習を経験する学生に対して教員が必要と感じる実習前の学習内容と方法

整備を実践するときに、臨床の病室の広さにあわせた作業領域の取り方やシーツ交換の方法など事前に学内で考えてほしい」などの〈臨床に合わせた看護技術〉が必要であると示された。

「うまく患者とコミュニケーションを図っているが、必要な情報が収集できていない学生がいるので、意図的な情報収集ができるような指導が必要である」という〈意図的・援助的なコミュニケーション技術〉や、「自分のコミュニケーションを見つめなおすためにはプロセスレコードが大事だと思っている」といった〈プロセスレコードを用いたコミュニケーションの振り返り〉が必要であると示された。

3. 【倫理的な事例検討】

【倫理的な事例検討】は、〈事例を用いて倫理的な内容に気づくきっかけ作り〉、〈倫理的な場面の考察〉の2サブカテゴリーから構成された。

〈事例を用いて倫理的な内容に気づくきっかけ作り〉では、「臨床実習では学生は緊張が高く、きっかけがないと倫理的な面に気づかないため、先にきっかけを与えておく」といった内容が示された。また、「臨床で見る倫理的な場面に対してなぜそうなのか考える必要があることを教える」など病院実習前に〈倫理的な場面の考察〉をする機会が必要であると教員は捉えていた。

4. 【グループメンバー間の意見交換】

【グループメンバー間の意見交換】は、〈グループメンバー間の意見交換〉の1サブカテゴリーから構成された。

教員は、「グループダイナミクスは必要で、グループの関係性が大切である。実習の前にいろいろな学生と意見を出し合う機会があるのは良かった」と、〈グループメンバー間の意見交換〉が必要であると捉えていた。

VI. 考 察

1. 既習内容の学び直しの必要性

教員は、初めての病院実習前に〈既習内容の復習〉、〈既習内容の想起〉を行い、既習内容の再習得が必要であると感じていた。「実習の前にこれまで行った学習を活かすため学生に想起させる機会をつくる」などの教員の語りから、学生は臨床での現象と既習内容とのつながりが曖昧であるため、既習内容を記憶から引き出すことが難しい状況であることがわかる。そのため、臨床で学習内容を学生が活用できていないことが推測される。よって、実習前に学生の知識を呼び起こすような臨床場面を設定し、既習内容を活用する機会を設ける必要がある。そして、教員が実習中も臨床の現象と既習内容が関連付けられるように支援する必要がある。また、教員は〈看護技術の再練習〉、〈看護技術の意義の理解〉という、基礎的な看護技術の再習得が

必要であると感じていた。学生は、看護援助の実施に精一杯であり、患者に応じた看護技術の提供には至っていない。そのため、学生は患者に応じた看護技術の実施に備えて、基本的な看護技術を正確に行えるよう事前に習得しておく必要がある。吉川、藤野(2021)は、臨地実習前の看護技術のトレーニングによって、学生は自信がつき、臨地実習中に落ち着いた行動がとれると述べており、学生が自信をもって看護技術を実施するためには、学内における練習が不可欠であると考える。よって、学内での看護技術演習が終了した後に、看護技術を繰り返し練習できる機会を設ける必要がある。また、学生の実習病棟に適した看護技術を教員が選択することで、学生が実際に行うであろう看護技術の練習ができると考える。

2. 臨床で実践する看護技術の必要性

教員は〈流動的な臨床場面の看護技術〉、〈意図的・援助的なコミュニケーション技術〉、〈臨床に基づいた看護技術〉という、臨床の場で生じる事象を踏まえた事前の学習内容と方法が必要であると感じていた。中本ら(2015)は学生が想定していたように効率よく看護援助を行えないことに困難感を抱いていると述べている。学生は初めての病院という緊張する環境の中、演習と異なる方法で実施しなければならず、学内で練習してきた通りの看護技術を実施することが難しくなる。また、臨床の場は患者の発言や行動、もしくは症状などが常に流動的であり、学生は困難感が生じやすい。そのため、実習前に臨床に類似した環境や患者の設定を行い、学生が臨床に合わせた看護技術を経験することによって、臨床の場に適した看護技術の工夫が理解できると考える。また、患者に応じたコミュニケーションや看護技術を通し、実習の実際の流れを把握する機会にする必要がある。

3. 倫理的な事例検討の必要性

教員は〈事例を用いて倫理的な内容に気づくきっかけ作り〉、〈倫理的な場面の考察〉という学生の倫理的思考を育むような学習内容と方法が必要であると感じていた。学生は、これまでの学内演習や他の領域実習において患者主体に看護実践する必要性を学んでいるが、対象者と関わる経験は少ないため、倫理的な現象に直面した場合、どうすればよいか戸惑いが生じている。一方、学生は初学者であるため、臨床ではじめて見学するもの、聞くことはそのまま当たり前のこととして受け止めてしまう可能性もある。そのため、病院実習前に倫理的な事例を用いて患者主体の看護とは何か検討することで、学生の倫理的な視野が広がり、臨床で倫理的な現象に直面した際、患者主体に物事を捉えることができるのではないかと考える。

4. グループメンバー間の意見交換の必要性

「グループダイナミクスは必要で、グループの関係性が大切である。」という語りから、教員はグループメンバー間の意見交換が必要であると感じていた。近年の学生はコミュニケーション能力の不足がある(厚生労働省, 2017)との指摘があり、人前で話すことが苦手な学生や、

初めての病院実習を経験する学生に対して教員が必要と感じる実習前の学習内容と方法

他の学生に意見を述べることを躊躇する学生などがみられる。また学生達は、2年間同じ授業や演習を受講しており、お互い認識はしているものの会話はしたことがないという学生も存在している。よって、学生の性格や特徴など理解できないまま実習が始まることも考えられる。水口(2003)は、臨地実習中にまとまりのよい実習グループは実習満足度と評価が高かったことを明らかにしている。そのため、前もってグループメンバー間で意見交換する場を設け、グループ内の関係性を築くことが必要である。

Ⅶ. 本研究の限界と課題

本研究は、初めて病院実習を経験した学生を担当した10名の教員からの意見であり、学生が求めている学習ニーズとずれが生じている可能性がある。よって、今後は、実習を終えた学生を対象に学習ニーズを調査し、今後の実習前準備学習プログラムの開発に役立てたいと考える。

Ⅷ. 結 論

初めての病院実習を経験する学生に対して、教員が必要と感じる実習前の学習内容と方法として、【既習内容の学び直し】、【臨床で実践する看護技術】、【倫理的な事例検討】、【グループメンバー間の意見交換】であることが明らかとなった。

1. 臨床の場で活用できるよう、これまでの学生の知識を想起する実習前の学習方法が必要である。また、臨床にて生じる状況に対応できるよう、正確な看護技術の習得を目指し、繰り返し看護技術の練習をするといった、【既習内容の学び直し】が必要である。
2. 学生が病院実習で戸惑わないように、患者の状態や発言が常に変化する流動的な臨床場面を設定し、緊張感がある中で、患者に適したコミュニケーションや看護技術を経験するといった、【臨床で実践する看護技術】が必要である。
3. 患者への対応が善いことなのか考えられるように【倫理的な事例検討】を行い、倫理的な視野を広げる機会が必要である。
4. 前もってカンファレンスの内容などを話し合う【グループメンバー間の意見交換】を行い、意見交換を通じて、臨地実習が効果的に進められるよう、まとまりの良いグループに調整する必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました教員の皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

Billings, D.M. & Halstead, J.A. (2019/2021). 佐々木幾美, 奥宮暁子, 小林美子(訳), 看護を教授するということ, 大学教員のためのガイド, 原著第6版, 282.

- 和泉明子, 大沢たか子, 矢野智恵, 伊藤光代, 三浦かず子, 今村優子, 高藤裕子, 吉亜紀子, 谷愛, 中井寿雄, 山暗江里子(2013). 臨地実習におけるカンファレンスの実態—教員のカンファレンス実施記録の分析を通して—, 高知学園短期大学紀要, 43, 47-57.
- 籠玲子, 佐藤美紀, 大津廣子, 川島良子, 小松万貴子, 曾田陽子, 西尾亜理紗, 長野きよみ(2013). 事前学習の取り組みによる基礎看護学実習前の看護学生の不安の変化, 愛知県立大学看護学部紀要, 19, 61-66.
- 厚生労働省(2019). 看護基礎教育検討会報告書, 1. <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (閲覧日: 2022.8.15)
- 松尾睦(2012). 経験からの学習—プロフェッショナルへの成長プロセス—, 同文館出版株式会社, 10.
- 水口陽子(2003). 看護学実習グループの人間関係に関する文献研究, 新潟県立看護短期大学紀要, 9, 3-11.
- 文部科学省(2009). 看護学教育の在り方に関する検討会報告, Ⅲ 臨地実習指導体制と新卒者の支援, 1. 臨地実習の在り方, https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm (閲覧日: 2022.11.1)
- 文部科学省(2017). 看護学教育モデル・コア・カリキュラム—「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の収録を目指した学修目標—, 1. https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1217788_3.pdf (閲覧日: 2022.8.15)
- 中橋苗代, 渡邊有紀, 梶谷佳子, 岡田純子, 廣澤紀代(2022). 初めて病院実習を体験した学生が抱く実習での困難感, 日本看護学教育学会誌第32回学術集会プログラム・講演集, 32, 162.
- 中本明世, 伊藤朗子, 山本純子, 松田藤子, 門千歳, 横溝志乃(2015). 臨地実習における学生の困難感の特徴と実習状況による困難感の比較—基礎看護学実習と成人看護学実習の比較を通して—, 千里金蘭大学紀要, 12, 123-124.
- 吉川由香里, 藤野ユリ子(2021). 基礎看護学実習 I 前に実施した時間外シミュレーショントレーニングの学生が認識した効果, 福岡女学院看護大学紀要, 12, 13-20.